

To the other side of the boundaries,

境界を跨ぐと、

開催趣旨

隣接する武蔵野美術大学と朝鮮大学校の2つの展示室を会場に、両校の境界にある壁(塀)に橋を仮設しつなげた展覧会「突然、目の前がひらけて」は、どのような橋を仮設するかを通して、対話をテーマに企画したプロジェクトでした。

"私たちの間にある隔たりとは何か?"と、双方の立場を明確にし、違いをあえて強調する壁の存在は、一方では自身を守るための壁であったにもかかわらず、対話の中でしばしば「私」の足元をぐらつかせました。

「私」はいま誰の物語(それはイデオロギー、歴史、立場から発現する)を語り、一方で相手は「私」をどのように捉えて言葉にしているのだろう。

突然、目の前がひらけて境界を跨ぐと、それぞれが見た風景はまったく別のものでした。

●どこまでが私なのだろう

—自分と“何か”との境界 —

その"何か"とは、"共同体"であったり、"敵"であったり、あるいは自分以外の"他者"であったり、作家によって様々です。

この展覧会は、作家それぞれが対話を持ち帰り、その"何か"

との距離をそれぞれの方法で測定し、境界線を引き直そうというものです。

自分以外の人の物語の引き受け方をインタビューして聞いてみたり、自分の夢に出てくる他者と現実存在する他者を引き合わせてみたり、半島を前に先祖の郷愁をなぞってみたり、その方法は様々です。あの対話を経て、今一度大きな物語の引き受け方を模索したり、その距離を問い直すこともできるかもしれない。

私たちが共にいることは、異質の価値観を持つ他者をもとめることで自分の中に揺れを内包し、既存の概念に対し自身の視点を持つプロセスです。

そのプロセスを個人が試行することによって、人間が長い時間を生きるために作った社会基盤やたくさんのルールを持続させていくための代替可能なパーツではなく、余白の世界を担保し、既存の価値観に問いかけることができます。